

第248回くらしの植物苑観察会 令和元年11月23日(土)

江戸の和本にみる菊

平野 恵(台東区立中央図書館 郷土・資料調査室 専門員)

重陽の節句と菊花 五節句のうち9月9日の「重陽の節句」は、別名「菊の節句」と呼ばれるとおり、菊に綿をしみこませる「きせ綿」や菊花酒を飲む風習のほか、菊花を薬用に用いた。

民間で古くから広くおこなわれていた年中行事を、日本や中国の書物を引用して解説した17世紀の書物『日本歳時記』には、「月と日と二ながら老陽の数にかなふ故にかくいふなり。又重九ともいふ。国俗今日より絮衣を着。又今日栗子飯を食ひ、菊花酒をのむ」と重陽の意味から、栗ご飯を食べ、菊花を浮かべた酒を飲むとある。漢籍を引用しながら、和文体を用いてわかりやすく解説

しており、また挿絵もあり、関心を向ける工夫がみられる。挿絵を見ると、庭に籬があり、丁子菊らしい花と通常の菊と2種類が描かれる。ここでは、庭に植えて栽培している点は判明するが、後の時代ほど手を掛けてない点が見える。

19世紀に幕府の命で編まれた百科事典『古今要覧稿』では、近年いわれている、菊のきせ綿が霜を避けるためという説は誤りで、諸書を引用し、正しい説を挙げている。

明治時代なかばに、前代の武家の年中行事を記した書物『徳川盛世録』では、重陽の節句の菊花の表現に、近世後期から普及した植木鉢の陳列形式を採用している点が興味深い。また、本文では、明治になって祝日としての五節句を廃し



『日本歳時記』巻5 貞享5年(1688)3月刊
貝原好古/編録 貝原益軒/刪補
台東区立中央図書館蔵

たとあるが、11月3日の紀元節には、引き続き各地で菊花の催しが行われ、重陽の節句が忘れられることはなかった。

重陽の菊酒 菊酒は、重陽の節句に、菊花を浸して飲む酒。加賀(現、石川県)や肥後(現、熊本県)から全国に伝わった。また、本草学者は、甘菊(料理菊)を用いるとし、詳しい特徴を記す。

元禄10年(1697)刊、人見必大著『本朝食鑑』は、様々な食材をとりあげ、毒性や効能を記した書物。加賀産と肥後産の2種を解説する。同様に、中国と日本の事物を図入りで解説した百科事典『和漢三才図会』は、加賀の産物として、「菊酒」を挙げている。

小野蘭山著『本草綱目啓蒙』は、講義録『本草綱目紀聞』を編集して出版した大著で、漢字片仮名混じりの平易な文体を用いて、植物の形状、大きさ、色、味を簡潔に説明するが、文章量としてはこれまででは最大である。薬屋にある菊花は、仙台産のものだとしている。



『本草図譜』巻13
国立国会図書館蔵

これに対し、小野蘭山の弟子の岩崎灌園の実物を写生した彩色図鑑『本草図譜』では、図化することで、文章の量が格段と減少し、必要最低限となっていることがわかる。

『雨月物語』における菊花の約^{ちぎり} 上田秋成の読本『雨月物語』は、中国の物語に取材した怪奇談集。「菊花の約」は、9月9日重陽の節句に再び会うことを約束した人物が、魂が千里を走るといふ故事を信じ、自らの命を絶って約束を守ったという物語。ここでは重陽の節句の表現に注目した。

播磨の武士、左門は、兄弟の契りを交わした赤穴との9月9日に再び会う約束を交わした。当日は赤穴を迎えるために、早起きして黄菊白菊を二三枝剪定し、小瓶に挿し、酒食を用意した。もてなすための「薄き酒」は、言葉通りであれば薄くてまずい酒であるが、人に勧める酒をへりくだってという言い方であり、菊酒とは異なる。このように、重陽の節句のために、左門自らが菊の生け花を準備している点がわかる。



『修紫田舎源氏』38編表紙 天保13年(1842)刊
柳亭種彦著／歌川国貞画 個人蔵

『源氏物語』になぞらえた合巻『修紫^{にせむらさきいなかげんじ}田舎源氏』の表紙には、男性である光氏が自ら行う生け花の様子が描かれ、菊花のほか、花鋏、水揚げ用ポンプ、金属製の花器が描かれる。このように、古くは公家、近世には武家の年中行事として発達した重陽の節句における菊の園芸は、男性が中心になって行われた。

.....

次回予告 第249回くらしの植物苑観察会 令和元年12月21日(土)

「昭和と平成のサザンカ」箱田 直紀 (恵泉女学園大学名誉教授)

13:30~15:30 (予定) 苑内休憩所集合 申込不要